

教養としての知識教授と授業構成理論

——「學制」頒布から「小學教則」期における小学校「地理」において——

米田 豊

明治二年五月に、我が国ではじめての小学校が京都市に設立された。翌明治三年六月には、六校の小学校が東京府で開校している。「學制」頒布以前の小学校では、その設備も教授方法も寺子屋と同様で、主要教科目は読書・習字であった。細谷俊夫は、この頃の状況を次のように述べている。

明治二年といへば、「小學規則」が設けられて、小学校の課程は句讀（素讀）、習字、算術、語學、地理學、五科大意等と定められた年であるが、當時は未だ府縣藩の地方行政と大學の中央教育行政との連絡が不充分な爲に、これらの規定も殆ど空文に歸した。そして江戸時代その儘の藩學、鄉學、私塾、寺子屋によつて讀書、習字を中心とする教育が依然として行はれてゐた。そしてたとひ曩の「世界國盡」の如きものが教授されたとしても國盡式に地名が羅列してある許りで、兒童には理解し難いもの、或は興味のないものとして、唯單に素讀の對象とされたに過ぎなかつた。従つて教授に於いては地理的要素には連絡が與へられず、地圖などは殆んど用ひることなく、自然地理の如きは極めて輕視されてゐた。⁽¹⁾

社会認識教科目の初見として、小学校に「地理學」が登場していることが分かる。しかし、現実には翻訳教科書の「素讀」に過ぎなかつた。「世界國盡」は当時の代表的な地理教科書とは言ふものの、「鐵道唱歌式の韻文體」で、小学生用の「地理」の教科書として意図的に編集されたものではないことが分かる。⁽²⁾

その後も、社会認識教科目として「地理學」が見られる。このことについて、菊池光秋は次のように述べている。

明治三（一八七〇）年閏一〇月に、京都府では中学校を設置し、十二月に開校した。（略）京都留守官のそれに関する理由を記した達しによれば、小学校と中学校の関係を述べるとともに、小学舎普通科においては、習字・算術（和洋）・語学・作文などのほか、「地理學」を学習すべき教科にあげてある。⁽³⁾

一方、文部省布達として社会認識教科目が登場するのは、「學制」に基づいて、明治五年九月八日に出された「小學教則」における「地學讀方（地理讀方）」や「地學輪講（地理學輪講）」である。⁽⁴⁾

このように、小学生用に意図的に編集されていない翻訳教科書の「素讀」が学習内容の中心を占め、地理学の研究成果を組み込んだ授業構成は見られなかった。この意味で、「學制」頒布から「小學教則」期における小学校の「地理」の授業構成理論を、「教養としての知識教授」と位置付けることにする。

本稿では、「小學教則」や教授方法の理論書における小学校「地理」の教授方法を分析、検討し、「學制」頒布から「小學教則」期における小学校「地理」の授業構成理論を歴史的に位置付けることを目的とする。

地學讀方・地學輪講における地理教育の方法

文部省は、「學制」頒布の翌月、明治五年九月八日に文部省布達番外として、「小學教則」を制定し、「學制」の方法を示した。ここでは、地理教育にかかわる「地學讀方」・「地學輪講」について分析、検討する。

1 地學讀方（地理讀方）⁽⁵⁾

「地學讀方（地理讀方）」は、小学校下等の五級と四級（児童の年齢は七・五歳から八歳）で履修することになっ

ている。週当たりの授業時数は、それぞれ三時間と六時間である。週当たりの総授業時数が三十時間であるから、地理教育の占める割合は高いといえる。

「地學讀方」の学習内容と方法は、「小學教則」に次のように示されている。

第五級 六ヶ月 一週三字 地學讀方 日本國盡ヲ授クル 讀本讀方ノ如シ

第四級 六ヶ月 一週六字 地學讀方 世界國盡ヲ授クル

『日本國盡』（瓜生寅著）と『世界國盡』（福沢諭吉著）が、教科書として指定されている。『日本國盡』の著者瓜生寅は、「學制取調掛」に任命された文部少教授の職にあった。福沢諭吉の『世界國盡』を範として本書全八冊を著している。総論で地球について述べ、「世界のあらまし」「日本のあらまし」のあと、畿内五国から各国の地誌について記している。

「小學教則」に「讀本讀方ノ如シ」とあるのは、授業方法を意味し、第六級から始められ、第六級「讀本讀方」には次のように示されている。

西洋衣食住學問のすゝめ啓蒙智慧ノ環等ヲ用テ一句讀ツ、之ヲ授ケ生徒一同之ニ準誦ス

「一句讀ツ、之ヲ授ケ生徒一同之ニ準誦ス」からは、当時の授業の様子を読み取ることができる。

このように、「小學教則」に示された「地學讀方（地理讀方）」の下等小学校五級・四級の基本的な学習方法は、教科書の読本と内容の暗記（暗誦）であるにとらえることができる。

2 地學輪講（地理學輪講）⁽⁵⁾

「地學輪講（地理學輪講）」は、小学校下等の三級から小学校上等の二級（児童の年齢は八・五歳から一三・五

歳)で履修することになっている。

「地學輪講」の学習内容と方法は、「小學教則」に次のように示されている。

第三級 六ヶ月 地學輪講 一週六字

日本國盡ヲ講述セシムル 讀本輪講ノ如シ兼テ日本地圖ノ用法ヲ示ス

第二級 六ヶ月 地學輪講 一週六字

既ニ學フ所ノ世界國盡ヲ順次講述セシメ兼テ日本地圖ノ用法ヲ示ス

第一級 六ヶ月 地學輪講 一週四字

前書或ハ地學事始ヲ以テ世界地圖ノ用法ヲ講述セシム

第八級 六ヶ月 一週六字

皇國地理書ヲ獨見シ來リテ講述セシメ兼テ地名ヲ記ササル地圖ヲ置テ其地名ヲ呼ヒ其所ヲ指示セシム

第七級 六ヶ月 一週六字

與地誌略ヲ用ヒテ前級ノ如クス但兼テ地球儀ヲ用ユ

『地學事始』は、松山棟菴によって著され、総論の後、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ、大洋州の地誌が記述されている。市岡正一の『皇國地理書』は、東京を出発して東西に分かれ、各国を旅行する形で地誌が語られている。『與地誌略』は、「學制取調掛」である内田正雄の著作で、『地學事始』同様世界各州の地誌が記述され、全八巻の大作である。

これらの翻訳教科書の「講述」が授業の中心をなしている。また、下等の第三級から「日本地圖ノ用法」を、第一級から「世界地圖ノ用法」が講述されている。ただ、講述の内容は示されていない。さらに、上等の第八級

から「地名ヲ記ササル地圖ヲ置テ其地名ヲ呼ヒ其所ヲ指示セシム」授業が行われている。これは、地名とその位置の学習である。第七級からは、地球儀を用いた授業が始められ、第一級まで継続される。

「小學教則」に示された「地學輪講」の特色は、次のようにとらえることができる。

① 『日本國盡』（瓜生寅著）、『世界國盡』（福沢諭吉著）、『地學事始』（松山棟菴著）、『皇國地理書』（市岡正一著）、『與地誌略』（内田正雄著）の教科書が指定されている。

② 基本的学習方法は、教師の「講述」を聞くことと読本と内容の暗記（暗誦）である。第三級の「讀本輪講ノ如シ」とは、「既ニ學ヒシ所ヲ諳誦シ来リ一人ツ、直立シ所ヲ變ヘテ其意義ヲ講述ス」ことである。

このことから、「地學輪講」は地理的知識の暗記注入が基本的学習方法であることが裏付けられる。

③ 日本地図（下等三級から）、世界地図（下等一級から）の用法が学習内容となっている。また、上等の八級での「地名ヲ記ササル地圖」（白地図）を用いて位置の学習が行われている。

④ 上等の第七級から第一級において、地球儀を用いた学習が行われている。ただ、ここでは地図や地球儀を用いた学習が示されているものの、学習内容については言及していない。

以上の分析、検討の結果、「小學教則」に示された「地學讀方（地理讀方）」「地學輪講（地理學輪講）」に基づいた地理教育の方法は、教師の講述を聞くこと、読本、内容の暗記（暗誦）であった。つまり、地理的知識の暗記注入が基本的な学習方法であった。

教授方法の理論書における地理教育の方法

ここでは、「學制」から「小學教則」の時期に出版された教師用の教授方法の理論書における地理教育の方法について論じる。対象とする理論書は、次のとおりである。今日に残されている理論書の中で、小学校の「地理」の授業についての教授方法に言及したものであり、分析、検討の対象として妥当性を持っている。

- ・ 諸葛信澄『小學教師必携』烟雨樓 明治六年
- ・ 東京師範學校教師金子尚政閱 筑摩縣師範學校編纂『上下小學授業法細記全』 明治七年
- ・ 青木輔清編『師範學校改正小學教授方法』東生氏 明治九年

1 『小學教師必携』⁽⁶⁾

諸葛信澄の『小學教師必携』は、おそらく教授方法の理論書としての初見であろう。本文三十五頁の小冊子で、下等小学校の第八級から第六級までの指導方法について論じている。

下等第六級の「讀物」では、「讀本、及ヒ地理初步ヲ授クルハ、前級ノ如シ」と示されている。「前級ノ如シ」とは、「誦誦」「誦讀」することである。

また、第六級では、地球儀を用いた学習について、次のように述べている。

地球儀ヲ示スハ、地球ノ形チ、及ヒ南北極、或ハ經緯度ノ線、或ハ赤道回歸線、或ハ熱帶寒帶、及ヒ暖帶ノ區別等ヲ、説キ示スモノナリ

「小學教則」では、地球儀は上等の第七級から登場する。しかし、『小學教師必携』では、下等第六級におい

て、地球儀を用いて「地球の形、南極・北極、経線・緯線、回帰線、気候帯の区別」を学習させることになっている。

さらに、第六級の「問答」では、次のように述べている。

地理初歩ヲ問答スルハ、書中の要處ヲ、諳記セシムルモノナリ、以下書物ヲ問答スト記セシハ、皆コレニ同シ

『地理初歩』とは、東京師範學校で編集し、文部省が刊行した教科書である。⁽⁷⁾

第六級では、「問答」とは「書中の要處ヲ、諳記セシムルモノ」であることが分かる。また、「以下書物ヲ問答スト記セシハ、皆コレニ同シ」からは、「問答」とは「諳記」を目的として行われていることが分かる。

2 『上下小學授業法細記全』⁽⁸⁾

『上下小學授業法細記全』は、筑摩縣師範學校の編纂で、東京師範學校の金子尚が政閲(校閲)している。理論に加え、筑摩縣師範學校附屬の授業実践を経て編纂されている。凡例に次のように示されている。

下等小學第八級ヨリ、第五級迄ハ筑摩縣師範學校附屬生徒ノ実践ヲ經、東京師範學校正課教師ノ刪正ヲ乞ヒ、授法已ニ一定セルモノトス

「地理」にかかわるものについて、分析、検討する。本書は、「讀物」「問答」において、『地理初歩』等の教科書や地球儀を用いて授業を進めるようになってきている。

下等第六級の「讀物」では、次のように示されている。

讀物 小學讀本卷ノ三、及び地理初歩ヲ授ク兼テ地球儀ヲ示ス

- 一 (略) 一斉ニ連讀セシムル、八級ニ同ジ
 - 一 連讀シ畢テ、各自ニ、二行ヅ、ヲ復讀セシムル、八級ニ同ジ
 - 一 一句ヅ、連讀セシムル、八級ニ同ジ
 - 一 一句ヅ、各自ニ讀マシムル、八級ニ同ジ
 - 一 意義ヲ説スルニ當リ、地球儀ヲ用キテ、地理學ノ便概ヲ授クベシ
- 復讀

一 意義ヲ講ゼシムルニ當リ、地球儀ヲ示ス、同級讀物ノ條ニ同ジ

教授方法として「復讀セシムル」こと、「一句ヅ、連讀セシムル」ことが強調されている。また、その内容は示されていないものの、「地球儀ヲ用キテ、地理學ノ便概」を教授することが示されている。「地理學ノ便概」とは、地理學の研究成果のことであろう。

また、下等第六級の「問答」では、次のように示されている。

問答 形體線度圖、及ビ地理初歩、地球儀、等ヲ問答ス

- 一 凡四十分マデ、地理初歩、及ビ地球儀ヲ用キテ、地球ノ旋轉、方角、里數、及ヒ經緯ノ線、寒温熱ノ三帶、五大洲、五大洋、等ノ區別ヲ問ヒ、峽、灣、岬、港、等ノ形ヲ塗盤ニ畫ヒテ之ヲ問ヒ、稍、地球上ノ大別ヲ知ルノ後、本邦ノ地圖ニ及フベシ、但、地理初歩ヲ問答スル、其問答スル所ヲ、豫メ謄記セシメ置クベシ

学習内容は、『地理初歩』と地球儀を用いて、方角や經線・緯線、氣候帶、五大洲、五大洋等となっている。学習方法は、塗盤(黑板)を用いて、地図や地球儀の基本的な用語と自然地理の基礎的な知識を問答している。

「諳記セシメ置クベシ」に見られるように、最終的には知識の暗記が目的となっている。

加えて、下等第六級の「問答」では、地図を用いての学習について、次のように詳述している。

一 本邦ノ地圖ヲ、問答スル、其位置、地形、五畿、八道、國名、及府縣ノ所在地等ヨリ、漸々、精密ヲ加へ、各地、經緯線ノ度、高山、大川、名所、古跡、等ノ・畧ヲ問フベシ、其法、教師、先ズ塗盤ニ地圖ヲ畫キ、之ヲ問ヒ、或ハ一國ノ形ヲ畫ヒテ、高山、大川ノ位置ヲ問ヒ、或ハ順次數國ヲ畫ヒテ、一道ノ形ヲナシ、稍、熟スルニ及テ一生ヲシテ、之ヲ畫カシメ、他生ニ質サシム、又國形ヲ物名ニ比シテ、記憶セシメ、又自國ヨリ他國ヲ指シテ、其距離ヲ問フガ如キ、最良法トス（略）

地形や五畿八道、國名、府縣ノ所在地等について、日本地図を用いて確認させている。学習方法は、塗盤（黑板）や地図を用いている。地図を書かせていることも特徴的である。しかし、その学習は、「記憶セシメ」の記述に見られるように、自然地理の基礎的な知識の暗記に終始している。二国間の距離を問うにしても、縮尺を用いたものではなく、距離そのものの暗記である。

下等第六級の最後の「問答」では、次のように示されている。

豫メ地理初歩中、問答スベキ所ヲ、諳記セシメンガ為メ、各自輪讀二三回セシメ置クベシ

『地理初歩』を「諳記セシメンガ為メ」に「輪讀」を徹底している。

下等第五級の「讀物」では、次のように示されている。

讀物 小學読本卷ノ四、及ビ日本地誌畧卷ノ一ヲ授ケ、兼テ地圖ヲ示ス、

一 日本地誌畧卷ノ一ヲ授クル、本邦ノ地圖ヲ塗盤ニ掲ゲ、書ニ照シ、各國ノ位置、方角、府、縣ノ所在、名山、大川、等ヲ質問スル、六級問答ノ條ニ同ジ

教科書が『日本地誌畧』に変わったものの、学習内容と方法は六級の「讀物」と同じである。『日本地誌畧』は、東京師範學校で編集された教科書である。四巻からなり、総論から始まり、畿内五国から北海道十一国、北海道及び琉球について説明している。地勢に重点を置き、都邑、物産についても述べられている。

以下、五級の「問答」においても『日本地誌畧』が用いられ、「問答」の前に「豫メ問答ノ所ヲ、生徒ニ諳記セシメ置クベシ」「豫メ諳記スベキ所ヲ、一二回、順讀セシメ置クベシ」とされている。四級の「讀物」や「問答」は、五級の内容と同様である。

第三級の「問答」では、事項暗記の様相が濃くなる。「問答」の最初で次のように述べられている。

(略) 此二書(日本地誌畧、日本史畧米田)ヲ問答スルハ、授讀、復讀ノ科ニ於テ、講究セシ所ヲ諳記セシメンガ為メ、設ケタルモノナレバ、質問ノ箇條ハ、授讀復讀ノ條ニ同ジ、但シ生徒ヲシテ本ヲ用キシメズ、教師モ無本ニテ質問スベシ

「生徒」に暗記させるのであるから、教師も暗記して本を用いずに質問するべきであるとの主張である。

第二級では、「暗射地圖」が用いられている。「暗射地圖」の使用について、次のように示されている。

(略) 暗射地圖ヲ用ヒテ、萬國地誌畧中、記スル所ノ各國及ビ都府、山、川、港、灣、岬、峽、等ヲ順次ニ指シ問ヒ、其位置、形勢ヲ知ラシムベシ、問答ノ法六級五級ニ同ジ、(略)

「暗射地圖」とは、白地図のことである。「暗射地圖」を用いて作業をさせている点に特徴がある。上等においては、第八級の「讀物」の「諳記」の項で次のように述べられている。

(略) 日本地理小誌ノ諳記ハ、府縣ノ位置、郡名等ヨリ地理ノ要所ヲ質問スベシ、(略)

上等になると、科目名に「諳記」が登場してくる。上等の第八級以下で示される「地理」にかかわる内容と方

法は、使用される教科書は変わるものの、地図や地球儀に関する基本的な用語と自然地理の基礎的な知識を問答することには変化がない。

『上下小學授業法細記全』では、随所に「諳記」等の知識注入に関する文字が多く見られる。また、『地理初歩』や『日本地誌畧』、『萬國地誌畧』等を教科書として用い、教師との「問答」による地理的知識の暗記注入が教授方法として主張されていたことが分かる。

3 『師範學校改正小學教授方法』⁽⁹⁾

青木輔清編による『師範學校改正小學教授方法』では、「地球儀教法」について多くの頁を当てていることに特徴がある。「地球儀」の教授方法について、次のように解説している。

教法はまづ地理初歩等にて既に習讀せし地球の形狀諸線の名稱海陸の區別等其生徒の學力に應じて答へ易き様に問を設け或は教え或は答へ又少しく進みたる者より一々其功用をも問をうけ答へ得ざる時は地理初歩或は地圖等のことを引用し生徒をして力限(略)其理を發悟するように教え導くべし

次いで、具体的に「地球儀問答」を列記している。最初の一例を示すと、次のとおりである。

○地球儀とは何なるや △此世界の細小なる雛型なり

問答を記述順に整理すると、次のようになる。

- 1 地球の周囲等の距離
- 2 水陸の割合
- 3 南極・北極
- 4 赤道・緯線・経線・回帰線
- 5 気候帯
- 6 大陸と大洋
- 7 季節の変化
- 8 日蝕・月食

このように、『師範學校改正小學教授方法』においても、地球儀を用いた教師との「問答」による地理的知識

の暗記注入が教授方法として主張されていたことが分かる。

以上、分析、検討した結果、「學制」から「小學教則」の時期に出版された教師用の教授方法の理論書における小学校「地理」の授業構成理論は、次のように整理できる。

- ① 「讀本」や教師との「問答」による地理的知識の暗記注入であった。
- ② 「問答」による地理的知識とは、地図や地球儀の基本的な用語と自然地理の基礎的な知識である。
- ③ 地理的知識の暗記注入のために「暗射地圖」や「地球儀」が用いられた。

「學制」から「小學教則」期における「地理」の授業構成理論

これまで見てきたように、「學制」期から「小學教則」期の授業構成は、「講述」「準誦」「獨見」「諳誦」の学習用語に示されるように、地理的知識の暗記注入が基本的な学習過程となっている。ここにおいて地理的知識とは、「小學教則」に指定された教科書の記述内容ということになる。その内容は、主に地図や地球儀の基本的な用語と自然地理の基礎的な知識である。もとより、教科書が子ども用に編集されたものでなかったため、小学生には内容が多く、高度であったと考えられる。

それでは、実際の小学校での地理学習はどうであったであろうか。中川浩一は、東京師範學校附屬小學校での実地授業を経て著された、諸葛信澄『小學教師必携』から、次のように分析している。

ここでは、「讀物」と「問答」の二科目において、地理の内容が扱われることになっている。そのための教材は「日本地誌略」であるが、地誌ヲ問答スルニハ、國及び國中ノ名山大川ノ位置、或ハ舊蹟又ハ産物ノ名ヲ問答シ、或ハ地圖ヲ以テ、其位置方角等ヲ問答スベシ、凡ソ書物ヲ問答スルハ、書中ノ要處ヲ暗記セ

シムルガタメナリ」というように、授業の展開は想定されていた。このようにみてきた場合、「師範学校」の地理教育はまったくの暗記注入法に終始したといつてよいであろう。地理はことばのうえで教授されてい
たと考えても概括的には、差し支えないと思われる。¹⁰⁾

このように、児童との問答さえも、「書中ノ要處ヲ暗記セシムルガタメ」であった。

また、中川は、スコット (M.M.Scott) によって伝授されたカルキン (N.A.Calkins) のペスタロッチ主義の掛図による教授法も、その意図が理解されていなかったとして、次のように述べている。

(東京) 師範学校は、実地の授業に用いる目的で各種の掛図を作成した。これらは、実際の事物を観察するかわりに使用するものであり、暗射図もそのひとつであった。しかし掛図を使う〈問答〉は、実際には答えを教師が教えこみ、児童にはこれを機械的に、かつおうむ返しに答えさせる方向に走ってしまった。このようにみていけば、先に引用した「小學教師必携」にみられる暗記注入主義の地理教育が登場するのも、またむべなるかなと評しえよう。¹¹⁾

「學制」から「小學教則」廃止までの時期は、教師による地理的知識の暗記注入が行われていた。まさに「地理的情報」の教授期であり、この時期の授業構成理論は、「地理的知識の暗記注入」と考えることができる。¹²⁾

「地理的知識の暗記注入」は批判され、「小學教則」は明治十一年年五月に廃止される。その後、「地理的知識の暗記注入」を克服するものとして、「開発主義」の教授方法が登場することになる。

【注及び引用文献】

- (1) 細谷俊夫『地理科問題史』『教育』岩波書店 一九三五年 三八五頁
- (2) 『世界國盡』（明治二年）の序文には、「専ら兒童婦女子ノ輩ヲシテ世界ノ形勢ヲ解セシメ、其知識ノ端緒ヲ開キ天下幸福ノ基ヲ立ントスル」と記され、啓発的な意図を持って編集されていることが分かる。また、附録の巻の六には地理学の総論、天文の地学、自然の地学、人間の地学について説明されている。
- (3) 菊池光秋『明治期より現在に至る地理教育の歴史』伊瀬仙太郎編『わが国の義務教育における教育方法の歴史的研究』風間書房 一九七二年 三一九—三二〇頁
- (4) 「學制」の第十一章には、「地學大意」が小学校下等の一四の教科に含まれている。しかし、その内容についての記述がない。「學制」と「小學教則」の公表一ヶ月のずれがあるだけである。「地學大意」と「小學教則」における「地學讀方」「地學輪講」は同様の教科と考えられる。教育史編纂会『明治以降教育制度發達史第一卷』教育資料調査会 一九三八年 三九七頁
- (5) 教育史編纂会『明治以降教育制度發達史第一卷』教育資料調査会 一九三八年 一四頁
- (6) 諸葛信澄『小學教師必携』烟雨樓 一八九三年 一四頁
- (7) 『地理初歩』は全文二四頁の小冊子で、地理学の定義、陸地と大洋、半球の別、方位、五大洲、経緯度、半島・山脈・海峡などの自然地理の項目で占められ、事象的地理情報だけの記載となっている。師範學校編纂『地理初歩』文部省 一八七四年（改正）
- (8) 東京師範學校教師金子尚政閱 筑摩縣師範學校編纂『上下小學授業法細記全』 一八七四年
- (9) 青木輔清編『師範學校改正小學教授方法』東生氏 一八七六年
- (10) 中川浩一『近代地理教育の源流』古今書院 七五頁一九七八年
- (11) 中川前掲書 七七頁
- (12) 『地理的情報』の教授期」の用語は、岩田一彦に依拠している。岩田は、この時期の特徴を次のように述べている。

「基本的学習方法は読本であり、内容の暗記であった。ここで習得される内容は、地理的情報の獲得である。したがって、この期を『地理的情報』教授期と名づけた。」 岩田一彦『地理教育史における『地理認識』観の変遷』『地理科学』四一巻一号 一九八六年 三四頁